

●中学生の部

協会一等賞中口 ひより なかぐち ひより

アニマルウェルフェアという単語をご存知でしょうか。家畜を単なる「物」ではなく、「感受性のある生命存在」として心を寄り添わせ、生活の質に配慮した畜産のあり方です。その核となるものが、飢え、不快、痛み、恐怖等からの自由と正常行動を発現するという五つの自由です。アニマルウェルフェアの考え方はイギリスから始まり、欧米諸国に波及しています。日本では二〇一六年にアニマルウェルフェア畜産協会が発足され、認定農場や食品事務所を中心に考えが広がっています。

私がアニマルウェルフェアに興味を持ったきっかけは二つあります。一つは宮沢賢治の「フランドン農学校の豚」との出会いです。この物語の中の豚は人の言葉が理解でき、人間と会話ができます。食肉となるため無理矢理太らされたり虐げられたりした後、殺される豚の様子や心情が描かれています。この本は普段食べ物=食べる「物」としてしか見ていなかった肉や牛乳の背景にいる家畜について考える発端となりました。二つ目は学校の授業で「アニマルウェルフェア」という言葉を耳にしたことです。附属高校の高校生からエシカル消費やフェアトレードをテーマに授業を受ける機会があり、アニマルウェルフェアはその関連語として出た言葉でした。短い説明ではありましたが「アニマルウェルフェア」という言葉に初めて触れることができ興味を持ちました。

この二つのきっかけからアニマルウェルフェアをもっと深く知りたいと思い、この夏私は北海道の牧場を訪ねました。旭川市にある「クリーマリー農夢」の佐竹さんは工業的な畜産のあり方を批判した本と出会いアニマルウェルフェアに配慮した酪農を実践されている方です。牧場を見学し、まず驚いたのは佐竹さんがまるで家族のように牛と接していることでした。「ゆめ」「はる」「バナナ」と牛一頭一頭に名前をつけ、掃除や搾乳をするときも声をかけながら行っていました。そのせいか、牛達の表情もとても優しく、私も安心して撫でたり世話のお手伝いをしたりすることができました。接し方だけではありません。冒頭に挙げた五つの自由を守る工夫はいたる所に見受けられました。牛舎はとても清潔で糞尿の匂いも少なく牛達の糞は牛舎からベルトコンベアで運ばれて牧草地の肥料になっていました。化学肥料は一度も使ったことがないという牧草地は五面あり、五面目を食べ終える頃には一面目の草が生え終わるそうです。佐竹さんは「酪農=循環」であると捉え、牛と共に環境にも配慮されていました。最後こそ人間が食べてしまうものの、同じ生きている者としてその命を大切に、愛情と責任を持って牛達を育てている佐竹さんの牧場は、正に人間と動物が寄り添っている五つの自由を追求している現場でした。

北海道から帰宅し、牧場で購入したチーズとパンを頂きました。それは確かにただの食べ「物」ではなく佐竹さんの優しい笑顔と触れ合ったあの牛達、牧場の風景が見えるごちそうでした。

「人も動物も満たされて生きる。」アニマルウェルフェアを調べるにあたって購入した本のタイトルの意味を体感し、納得した瞬間でした。私が最近までアニマルウェルフェアという言葉が知らなかったように、まだこの取り組みについて知らない人もたくさんいると思います。食べ物の背景に目を向け知ること、そして選ぶこと。それこそが命をいただく私たちが持続可能な社会をつくる上での義務なのではないでしょうか。